

## フィールドで豊かに悩む : 「第四世界の人類学」へのコメント

片岡, 樹  
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/2338974>

---

出版情報 : 九州人類学会報. 31, pp.63-64, 2004-07-17. Kyushu Anthropological Association  
バージョン :  
権利関係 :

## コメント

フィールドで豊かに悩む  
—「第四世界の人類学」へのコメント—片岡 樹  
(九州大学大学院)

本セッションの各報告者に一貫して共有されている問題意識は、生身の人間が生身の人間と現実のフィールドで対峙しなければならないという、人類学に固有の問題から生じるジレンマとどう向き合うかという野心的な試みである。このジレンマとは関与（対象社会の「問題点の改善」をめざす）と理解（対象社会の内在的理解をめざす）との矛盾といいかえることができる。かつての近代化論に典型的にみられるような関与の視点には、往々にして個別文化を邪魔者扱いする傾向があったのは事実であるが、しかし個別文化の内在的理解に留まることは、目の前の社会悪に対して無力であるばかりかそれを正当化してしまう場合もある。飯嶋氏はこの点に関し、「貧しい解決より豊かな悩み」を提唱する。文化を内側から理解しつつ外側から批評するのが「厚い記述」の目標だとすれば、これは人類学が負い続けてきた宿題にほかならないということになる。ならばいかに「豊かに悩む」か。そのための方途を各報告者とともに以下では考えてみたい。

まず飯嶋報告の場合、視点は明快である。そこでの豪州先住民の事例は、不品行とされるリバー・キャンパーの行動が、内在的に理解すれば実は逸脱行動ではないというケースである。端的にいえば、「問題視することが問題」なのであって、ならばその「問題なるもの」はリバー・キャンパーの内部ではなく外部に存在する。ここで氏が指摘するのが「自己決定」という因子である。つまり先住民のうち都市に定住地を有する「真正な」グループからのリバー・キャンパーに対する白眼視が、先住民の「自己決定」の名のもとに、周囲の非先住民を含む地域社会に無批判に受容されてしまうという事態である。もし人類学が、単に先住民活動家への迎合によってフィールドとの和合をめざすとすれば、それは典型的な「貧しい解決」ということになりかねない。

もっとも、「自己決定」という言葉を以て擁護さ

れうるのは「真正な」先住民ばかりではない。リバー・キャンパーの行動が内在的に理解可能という氏の説明もまた「自己決定」の尊重であり、ここにこそ関与と理解とのジレンマが見出されるからである。リバー・キャンパーの行動が内的整合性をもつという説明は、しかし年金生活者が勤労納税者のすぐ脇で白昼公然と宴会を行うことへの素朴な反感を解決しない。リバー・キャンパー、都市定住先住民、非先住民入植者が構成するこの地域社会で、共通の価値規範はいかに形成されるのか。人類学者が耳を傾けるべきとされる「フィールドの声」の重層性をいかに処理するか。「豊かに悩む」とすればそれがひとつの争点となろう。

次はインドの児童労働に関する針塚報告である。ここで「問題」とされているのは普遍的とされる「子どもらしさ」とその「剝奪」である。これまで個別文化の多様性や個々の文脈を無視して押しつけられる（たいていは欧米起源の）普遍的理念に対し、人類学は多くの異議申し立てを行ってきた。一方で「虫の視点」からの「弱者」あるいは「周縁」とされる社会への共感的理解を掲げ、「強者の論理」の相対化をめざしてきたのもまた人類学である。では個別文化の理解を尊重することが「弱者」への共感につながるのか？あるいは普遍的理念を掲げた「人道的介入」の方がより人間的なのか？ここには古くて新しいジレンマがある。

針塚氏はインドの個別文化に即した子ども観を提示し、児童労働問題における普遍的な平等観を相対化する。デュモンのカースト論を援用して展開されるこうした議論の先には、当然ながらデュモン一流の近代平等主義批判が帰結されるはずだが、しかしここではそうなっていない。むしろカーストが是認する不平等に対し氏は批判的である。ここが関与と理解をめぐる、氏のジレンマであろう。氏の注目する某 NGO の活動は、子どもの多様性を認め、理解しつつ関与するという意味で、こ

の二律背反を調停するかに見える。しかしここで多様性なるものはかぎりなく不平等と同義である。ならば某 NGO の活動は結局のところカースト制を補強していることになりはしまいか。普遍的な人権モデルとデュモンの平等主義批判とをいかに消化して独自の視点を提示できるか。おそらく氏の(我々の) 悩みどころはここにあるはずである。

最後はチリの都市貧困に関する内藤報告についてである。一般論としていえば、スラムの住民というのは、外部(お金に困っていない人)から否定的なレッテルを貼られやすい。こうした一方的なレッテルに対して、スラムを「内側の視点から」擁護しようとする場合に陥りやすいのが、都市貧困層を「豊かな未開人」の末裔としてロマン化してしまう誘惑である。内藤報告が最後にたどり着く関与と理解のジレンマはここにあると言える。

このジレンマが交叉する地点として内藤氏が示しているのが、サンチャゴ貧民の独自の時間観念である。一読すればわかるように、これはサーリンズが「豊かな未開人」を説明するためにあげた、狩猟採集社会における「資源の過小利用」と極めて近い。生活全体が市場からの要請に沿って組織されていないという意味では、この事例は「社会に埋め込まれた経済」(ポランニー)が近代社会の大都市部において発生していることを示している。サンチャゴ貧困層の時間観念が「異質」に見える

のは、それが(たとえば機会的損失等の語で)市場価値に換算されていないということによる。それ自体は本来問題ではないはずなのだが(時間まで市場化することの方が問題なのだ)、近代社会の都市のただ中ではしかしそれは「問題」として浮上せざるを得ない。そこにより大きな問題があるのであり、ここが「豊かに悩む」ためのひとつのポイントになるのではないだろうか。

最後に簡単に付言しておきたい。人類学の世界には「現地」という差別的なカテゴリーがある。それは調査地のことだが実際には「欧米人によって調査されるべき非欧米人」に等しい。ここで我々は、欧米の人類学者が、「我々」と「彼ら」=「現地」=「非西洋」とのあいだに暗黙裏に設定する二分法の文脈に自らを同一化することはできない。なぜなら日本人もまた「現地人」に決まっているのだから。一方で我々が援助大国の国民として、その対象たる「彼ら」と向き合わねばならないのもまた事実である。我々が日本人として人類学を志す以上、従来の二分法を加工し、独自の関与や理解の言葉をもたねばならないだろう。その意味では、ここで報告者たちとともに悩んだジレンマとは、日本人として人類学を学ぶことの本質に通じる問題でもあることがわかる。多くの問題に気づかせてくれた各報告者に対し、最後にお礼申し上げます。